

講演をめぐる討議

松村 四、五人でグループを作り、五分間ほど話し合いをしてみま

しょう。自分は、こんなところがおもしろかったということ、これは質問したいと思うことを、グループの中で一つずつきめていただきます。グループの座長は、それぞれ、ここから一番遠い方にし、全員がそこに参加するようにしましょう。ハリス先生に感謝することは、おもしろかったと思う点を述べ、また要求を出すことではないでしょうか。それではグループの話し合いをはじめましょう。(話し合い)

グループA 今日のセミナーの中で理想的人間ということが出てきましたが、ハリス先生は、どのような人間を理想的と考えていらっしゃるのでしょうか。その理想像をお聞かせください。

グループB モンテッソリーのやり方は、もう古くなってしまったものと考えていましたが、あらためて考えなおしてみなければ

いけないということを話し合いました。モンテッソリーのやり方を幼児教育にとり入れるとき、先生は、モンテッソリーのものにさわることで、つまり感覚的刺激の面を強調されているのでしょうか。

ハリス モンテッソリーのやり方は、ただ感覚的にさわるということだけではないように思います。もっと広いもので、モンテッソリーは早くからいろいろと経験することが大事なことであると思っています。この点などあらためて再評価されるべき点と思います。幼児教育には、しばしば、流行のようなものがあるようで、今、アメリカでは、モンテッソリーふうにもどるといのが一つの流行のようけとられているくらいがあります。たいがいの人はもう少しおもしろいものがないかと探しているようです。

津守 いつも先生と話しているのですが、モンテッソリーは、ある面では、見直す面があるが、たくさんのは古いものが多い。触覚的な刺激などをふやすということでは教材の面で、考える点があるということです。

グループC ハリス先生は、刺激があまりに少なすぎると、それがために、こどもが、虚脱状態になるといわれましたが、実際そのとおりだということを話し合いました。質問として、初期の刺激ということをしばしばいわれましたが、その初期とはい

つころをさすのでしょうか。

ハリス ごく一般的なことばであって、生まれてからあとの、比較的早い時期という意味で使われていて、幼稚園に入ってから、という意味ではありません。先ほど代償教育（欠陥を補なう教育）の話をしたけれど、たとえば恵まれない家庭の子どもを、二歳のときから、三歳のときから、四歳のときから、五歳のときからというように教育をはじめるとき、二歳のほうが、より「初期」でより効果があるという、この意味の「初期」です。

浅見 いま、ハリス先生のご説明にあったとおりに考えていいと思います。発達のプロセスの中には、いろいろの現象があります。たとえば、ことばがはじまりだすとか、三角形や四角形がわかるような時期があると思うのですが、そういうものがまだはっきり現われていない頃ははじめが問題だという意味で「初期」と言われているのだと思います。KatzやHoltは「生まれてからすぐ目のあいている子どもたちは、まだ何の見分もつかないから、何も見せなくていいのではなく、この時期に受ける刺激が大切である」といっている。こういう意味における「初期」と思います。

グループD いまの浅見先生のお話と関係のある話題が、このグループでは出ました。このグループのある先生は「後の生活、その人の生活、たとえば対人関係をとおして、殻を作っていく

という過程で、いろいろの行為の可能性を邪魔する要因が出てくるのではないか」という意見を述べられました。

ハリス ここでこういう経験をして、ここでこういう結果として現われる、その途中には、その人が生活をとおして作ってくるその人の殻みたいなのができってくるわけだから、確かにそういう意見もあるでしょうね。

グループE たいへん興味をもって聞いたのは、こどもの成長にとって刺激が大切であるということです。もう一つは、訓練をすれば、それぞれ、個人の差が大きくなるということ、このことは、私どものグループでは、はじめてきいたこと、興味のある事柄でした。次に質問として、母親の話の内容が、ちがうことよって、こどもの思考能力がちがってくるという話がありました。それは、どういうことであるのか、よくわからなかったので、教えて下さい。

ハリス シカゴのブラウンという学者が、中産階級と下層階級の母親がこどもに話しかけることばを調べたところでは「下層階級ではこどもに対して、非常にあいまいな一般的な、はっきりしないことばを使って答える。質問などにも明確に答えられない傾向があるが、中層階級の親たちはこれに比べて、質問などに対してははっきりした概念をもった答え方をするので、それが学校生活で使われることばに近いので、結果的には、下層階級の

こどものほうがずっと損をしていて、知能面でもたぶんその影響もあってか、十分に成長できず、低いらしいといっている。

そのことをいったのです。

グループF 個人の能力と刺激について話し合いました。刺激は同じでも、人と環境があって、その刺激がかわるることによって、人の能力が無限にかわつたりのびたりする考えがあることがわかりました。質問として、日本では、保育所における保育と、幼稚園における教育は、行政的に分離していますが、(つまり保育所は厚生省、幼稚園は文部省管轄)このことと、先生の講演の最後にいわれた、児童学を一つの方法に限らず、いろいろな方法で考えてみるということを関連づけてどう考えられるかを聞かせて下さい。

(ハリス先生のうなずき、笑いとぎわめきがただよう)

ハリス アメリカでも、そういうようなちがいがあります。役所のちがいで、異った名称が使われることもある。実際には、幼児教育を研究している人と、幼児教育を実践している人との間に、相当はつきりしたちがいがあつたのです。研究者にもいろいろの人がいますが、実践者は、研究者に助けを求めればかりで、自分で研究をする人が少ないということがいえると思えます。そういう点は、やはり問題であると思えます。

松村 この会の進め方についてですが、ここに帆足先生がいらっ

しゃっているのです、あとで、先生の意見と質問を入れていただき、残っているグループにいったいて、一番最後に、ハリス先生の人生観と幼児観とをまとめていただきましょう。

グループG はじめの母親の愛情と刺激ということが別のこのようにきこえたのですが、愛や情緒も学習する事柄で、愛も刺激という面であらわれなければつたわらないのだと考えるようになりました。質問として、幼児の保育をすすめるために知能テストはどのような役割を果すのでしょうか。

ハリス 私は、やはり、愛情とか、母親の情緒的な面は大事だと思えます。刺激ということから考えても、情緒的に安定した母親は、より多くこどもの世話をしたり、あやしたりするのではないのでしょうか。

グループG そのことは、表現として、接触することがよりよいということですか。

松村 よりよいかどうかということとはわかりませんが刺激を与えるのは非常に大切なことで、愛情をもっている母親は、その刺激を加える度合いが多くなるだろうということではありませんか。そのよし悪しは、自分で考えること。

津守 その愛情というのは、刺激だけではなく、刺激プラス何かということが、ハリス先生の考えにはあると思えます。

グループH 研究の紹介の合い間に考える機会がもてました。そ

の中で特に、刺激の量や強さというものとこどもの成長発達との関係がはつきりしたこと。そして現在の日本の幼児教育のあり方、と母親の家庭におけることもへの刺激、ということを考え合わせながら聞いていたということがあげられました。質問としては、可能性を深めるための心理学として考えたとき、ハリス先生は幼児理解にポイントをおいていらっしゃるのか、幼児教育にポイントをおいていらっしゃるのか。

ハリス これはえらい質問です。以前はこどもを教育するのに何より大事なものは、こどもを深く正しく理解することだと考えられていましたが、最近の研究では、それはともかくとして、特定のある種の刺激を強烈に与えることがこどもをのばすということが出てきたので、そのどちらを重くみるかということは、問題だけでも、確かにもっと二番目のほうの研究を深めていく必要がある。なぜかというところ、いろいろなことがわかってはきているものの、思うようにこどもを、思うところまでのばすということが決してできていないので、そういう研究は大いにのばす必要があるけれども、一方では、それを実際にやる場合に、こどもを十分に理解した上で行なわなければ、こどもに対して、大変不当な刺激をしていることになりかねないから、いずれもすてがたいと思います。

グループ I 幼児教育というのは、幼児の側から考えていくこと

ができる。幼児教育の理論が生まれてくるのはこれからだということに興味をもつてうかがいました。質問としては、これからどういう方向で幼児教育の理論を作っていくのか、それに關してハリス先生はどのように考えていらっしゃるのか。

ハリス 今、いろいろな人が、考えをぼつぼつ発表してきていますが、それをゆっくり勉強してそれをだんだんまとめていこうと思つています。いまずぐ何かまとめようという考えは無理だろうと思つています。

グループ J 興味をもつてうかがった点は、刺激をうばうと発達が遅れ、刺激が多すぎるとどうなるかという研究がすすめられるとおっしゃったけれども、その刺激が多いところを観点をあてられたということです。質問は、知能の構造因子は非常に複雑であつて、一つの方法だけで教育したのでは、この複雑な因子から考えてもだめである。したがつて、具体的には、もつといろいろな方法を考えなければいけないとおっしゃったが、それをもう少し具体的に教えていただけたらありがたいと思つています。もう一つは、先ほどの多すぎると、ということを具体的に教えていただきたいということです。

ハリス 第一は、刺激の与えすぎということをいいましたが、それに関しては、きちんとした実験のデータがあげられるわけはありません。が、実験をおしてではなく、現実の場面で、印

象的には、いろいろの例はあげられますし、教育的にも、一度にいろいろなことを習わせすぎたために、逆効果となるというようなことがあります。第二は、たとえば学習のやり方や内容をできるだけ個別化していくことなどがいえます。一人一人のことも、それぞれ別々な内容の勉強をする。たとえば、その時間に、復唱する形の勉強をすることもがいたり、意味のある結びつけをする形で同じようなことをすることもがいます。

このように、いろいろな教え方ややり方を教師自身が何でも使えるように、また、それを弾力的にできるようにして、そういう形で学習をすすめていくことが、個人の能力にあつた多様化された教育であると思います。

帆足　ここで質問したいのは、刺激が多いほうが、知覚の発達はいいわけですが、その与え方についての一般原理が出てくるのではないかということと、刺激の質についてはどのように考えていらっしゃるのかということです。

ハリス　これは非常に重要な点であります。最近までの研究では、どうも刺激の質とか与え方についての、きめの細かい配慮がされておらず、刺激さえあれば、何でもいいかのようなことがいわれていたり、その点がまだわかっていなかったりしておりますので、今後の問題とします。たとえばスラムの子どもは発達が遅いといわれるが、これは必ずしも刺激がないわけでは

なく、刺激をどうかたちつけていくか、つまりパターンとしてどういうふうに与えたらいいかということが重要になるわけです。先ほど申し上げたカツツやスピッツの研究でも刺激の量という問題に目がむけられるようになってきています。

松村　ありがとうございました。それでは、最後にハリス先生に、全体の大きな幼児観ということを話していただきたいと思えます。そのあとで津守先生に、ご自分の考えをいっていただくことにしましょう。

ハリス　児童観をひとこととすることで、述べてみます。

最近の心理学において使われることばは、子どもにとってまことに不幸な状態であると思います。というのは、刺激対反応(S-R)ということがよくいわれますが、これは心理学的には有用な概念ではありませんが、いかにもそういわれますと、子どもは何か刺激がくるまでじっと待っているような受動的な立場であるように聞えます。この考えをもう少し進めてみます。

よく考えてみると子どもというのは、人々はこの考えをもう少し進めて、子どもは環境の産物だという見方をする。環境によってかたちづくられ、影響を受ける。一方子どもの方を見ると、子どもは環境に働きかけ、環境に影響を及ぼす、環境を子ども自身が立派に作っていくわけです。これはよく親や教師が経験することですが、子どもにある種の学習をさせよう

とすると、用意万端整えて始めて始めようとする、こどもは、全くそれを無視し、勝手な行動をとり、いわば、何もしてくれないということがよくあります。ここが大事などころです。

こどもというのは活動的 (active) で能動的 (agent) で創造的 (creative) なるもので、環境を自分の手で作る力をもっている。こどもはまわりの人によって決定される面もあるがこどもがまわりを決定つけていく面もある。しばしば親の苦勞するところで、私も親のひとりですが、こどもを思うようにしつけていようにしようと思っても、こどもといっしょに生活して、生きるということを学ぶ面がたいへん多く、こどもの方も親とつきあっていく術を覚えると同時に親の方もこどもとつきあっていく術を覚えていくのが現実ではないでしょうか。ちょっと自分は旧式なかもしれないが、こどもを教えることは芸術だと思っています。こどもという一つの生きものを適当な友達との関係、世界との関係において立派なおとなに育て、そのために必要な知識を与え、社会的に適応できるこどもにしていくというプロセスを見守っていくのがこどもの教育で、その間こどもは環境に対して、こどものほうが、譲歩することもあろうし、環境のほうがこどもに対して譲歩することもあろうし、そのプロセス全体を見ると全く一つの芸術といっている。昔、ローレンス・フランクという人も S—R 反応を好まず、それがこ

どもの教育に真実を伝えていないような気がして、それに対する意見を述べているのですが、その場合こどもというものはリアクト (react) するのではなく、こどもとおとながインタール・アクト (interact) するのではない、おとなとこどもの間、こどもとまわりとの間はトランスアクト (transact) するものであって、これは同時に交錯し、相方から相手方を刺激し、相手の刺激を受けるという状態のことです。このような関係を考えるのが一番、私の考え方には合っています。このトランスアクション (transaction) をとおして、こどもと周囲とは同時に変化をするわけでありまして、単なるリアクション・反応 (reaction) ではありません。

津守

ハリス先生は、教育というのは芸術だということは、自分は旧式かもしれないけれどおっしゃいましたが、僕はそこがたいへん新式で、先生が新式である理由であると思います。この数か月間、先生といっしょに、多く話をする機会があり、いろいろ考えたのですが、西洋の学問というのは、いろいろ分析したり、こまかくわけたり、いろいろ考える仕方を進めてきましたが、また、私たちもそれを学ぶことによりそれをますます進めていきますが、まだ子どものことについてわからないことがたくさんあります。教育の中で、特に生きた子どもというのは、今はまだわからないが、だけど、こどもは、今現に成長しているという

ことがたくさんあるので、そこで、教育というのは、いまわかつている知識を使うというのではなくて、やはり子どもと共に生活して、その中で、理論でわかっている部分だけでなく、わからない部分をもまたふくめて、子どものことに役だてるようにしていかねばいけないと思います。そこに、私どもが、実践をしていくときにいつも考えていかなければいけないことがあるのであろうと思っています。これから、だんだんに理論を作ってわかりやすいものが、どんどんできていくでしょう。私どもは、いつも、こどもが生活していくのを、こども自身で生活できるようにしていきながら、研究を進め、またそういう生活ができるような子どもの場を作っていくことにいっしょうけんめい努めなければいけないのだらうと思います。ハリス先生の話は、これでおわりです。

今まで先生に三回公開講演をしていただいて、また毎週講義やセミナーをしていただいて、いろいろなことを話し合いなごらたいへん多くのものを学びまして、共通にわかり合ったことがたくさんあったように思います。また、これから日本の教育界、世界の教育界に、先生が貢献してくださることをのぞみます。先生はたいへんな勉強家でいらっしゃるので、きっと幼児教育の理論を作ってくださいるだらうということを確信し、また希望いたします。どうもありがとうございました。

REFERENCES

- Allen, K. Eileen and Florence R. Harris. Elimination of a child's excessive scratching by training the mother in reinforcement procedures. *Behav. Res. & Therapy*, 1966, 4, 79-84.
- Ausubel, D. P. and Robinson, R. E. *School Learning*. N. Y.: Holt, Rinehart and Winston (in press, 1969).
- Bayley, Nancy. On the growth of intelligence. *Amer. Psychol.*, 1955, 10, 805-818.
- Bereiter, C. and S. Engelmann. Observations on the use of direct instruction with young children. *J. Sch. Psychol.*, Spring 1966, 4, 175-184.
- Berlyne, D. E. Curiosity and exploration. *Science*, 1966, 153, 25-33.
- Bowlby, J. Some pathological processes set in train by early mother-child separation. *J. Ment. Sci.*, 1953, 99, 265-272.
- Braine, M. D. S. The ontogeny of English phrase structure. *Language*, 1963, 39, 1-13.